

タルドとラトゥールのつながり

——アクターネットワーク理論をめぐって——

北海道教育大学 池田祥英

1 目的

本研究の目的は、フランスの社会学者・人類学者であるブリュノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論 (ANT) の成立について、彼自身が頻繁に引用しているガブリエル・タルドの思想からの影響という観点から解明することである。

2 方法

まず、ラトゥールの ANT の概要を『社会的なものの再構成』(Latour 2005) によって確認し、ラトゥールが非人間も含めた諸物のつながりを対象とする新たな社会学像を提示していることを確認する。そのうえで、ラトゥールの著作におけるタルドの位置づけについて、ラトゥールが主として依拠している「モノ論と社会学」(Tarde 1895a) のほか、あまり言及の見られない「社会的実在」(Tarde 1901)、「心間心理学」(Tarde 1903) などを取り上げて、両者の立場の異同を検討する。

3 結果と結論

タルドはライブニッツのモノ論の仮説から「予定調和」を排除し、それぞれのモノが精神的存在として互いに影響し合うものとみなした。そして人間の集合体にかぎらず、原子や細胞をはじめあらゆる要素の集合体を「社会」として扱うことができる、とタルドは考えた (Tarde 1895a)。ラトゥールはこのようなタルドの主張を高く評価し、アクターネットワーク理論の先駆けであるとみなしている。この点におけるタルドとラトゥールの立場はかなり近いといえる。

一方で、タルドとラトゥールの主張の相違点もみられる。タルドは確かに「動物社会」「細胞の社会」「原子の社会」について語っているが、「モノ論と社会学」においては、ラトゥールが構想するような人間と非人間の混成による社会という構想ははっきりとは見られない。また、タルド自身がモノ論という形而上学的議論を展開しながらも、それを犯罪や群集といった現実の社会現象を扱う社会学理論から明確に区別しており (Tarde 1895b)、この点もラトゥールの主張と相いれない。

人間と非人間の混成による社会という考え方については、ラトゥールが頻繁に言及するモノ論よりも、「心間心理学」(psychologie inter-mentale/inter-psychologie) を純粹に人間同士の相互作用に限定し、「社会学」を人間のほか、それを取り巻く物理的な作用との関係まで含むものにとらえなおしたタルドの晩年の構想に近いと考えられる (Tarde 1901; 1903)。この点についてラトゥールはあまり意識していないと思われるが、ANT とタルド社会学の関係を考えるうえで極めて重要である。

文献

- Latour, B., 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford: Oxford University Press.
- Tarde, G., 1895a, *Monadologie et sociologie*, in Gabriel Tarde, *Essais et mélanges sociologiques*, Lyon : Storck/Paris : Masson, 309-89. (=2008, 村澤真保呂・信友建志訳「モノ論と社会学」『モノ論と社会学／社会法則』河出書房新社, 123-234)
- , 1895b, *Appendice (Psychologie des foules)*, in Gabriel Tarde, *Essais et mélanges sociologiques*, Lyon : Storck/Paris : Masson, 423-9.
- , 1901, « La réalité sociale », *Revue philosophique*, 52: 457-77.
- , 1903, « L'inter-psychologie », *Bulletin de l'Institut général psychologique*, 3: 91-118.